

## 国際協力特別賞

全ての子どもに教育を

聖和女子学院高等学校 2年

松山 亜希

正直に言うと、私は涙もろい方ではありません。しかし、それはこの夏フィジーで1ヶ月間ボランティアをする上で良い事だったと思います。なぜなら、私がフィジーで見たり、感じたり、触れたりした事は涙を誘う事が多く、涙は役に立たないと感じたからです。

私はボランティアで、教育のプロジェクトに携わりました。現地の保育園と小学校で授業の補助をしたり、実際に公衆衛生や地球環境についての授業をしました。現地の子ども達はとても意欲的で、私の話を熱心に聞いてくれました。その中でも特に熱心で、私に会う度に笑顔で話しかけてくれるステラという少女がいました。彼女は10歳で、村の小学校に通っています。彼女は優しく、思いやりに溢れた子でした。フィジーを離れた今でも彼女は私にとって忘れられない存在です。彼女は6歳の弟と母親と3人で小さな粗末な家に暮らしていました。ある日、私はステラと彼女の母親と3人で話す機会があり、その時私はステラに、大人がよく子どもにするような質問をしました。「好きな教科は何?」「大人になったら何になりたい?」すると彼女は顔を下に向け、悲しげにこう答えました。「私に未来はないの。だって私は中学校には行けないから。」私は驚いて彼女の母親の方を向くと、彼女の母親は、ステラを中学校に通わせるだけのお金がないのだと説明してくれました。また、彼女の弟トゥルが小学校に通っていない事も知りました。私は、新聞やニュースで耳にした現実に直面し、やり場のない悲しみを感じると同時に、とてももったいない事だと思いました。なぜなら、彼女らはフィジーの未来の担い手であるべきだからです。そして、このような問題を抱えるのは彼女らだけではありません。実際に、トゥルと同じように小学校にさえ通えない子どももいました。さらに世界に目を向けると、戦争や貧困また女の子というだけで教育を受けられない子どもがたくさんいます。その数は約5800万人にも上ると言われています。

かたや日本では、小学校、中学校は義務教育となっており、また高校は授業料無償化制度があるので、ほとんど誰でも教育を受ける事が出来ます。私は、フィジーの子ども達にも同じように教育を受けて欲しいと思いました。なぜなら、教育こそが彼らにとって最も大切な事だからです。

また、ベンとの出会いは私にとって印象深い出来事でした。彼は私の滞在中に兵士としてシリアに旅立ちました。私はシリアと聞いて恐ろしくなり、どうしてそんな怖い国に行く

のかと尋ねました。すると彼は、世界を平和にしたいという僕の思いは、恐怖なんかよりもずっと強いのだと真剣な眼差しで語ってくれました。私は彼の力強い言葉に感動し、彼のように固い意志がなければ、世界平和という大きな目標に向かって進むことは出来ない、と教えられた気がしました。

私は以前から、世界で困っている人の為に働きたいという、漠然とした思いがありました。今回、ステラのように学校に行けない子ども達を目の当たりにし、私の漠然とした思いは確固たる意志へと変わりました。それは、ベンのように強い意志を持った国際公務員となり、全ての子どもが平等に教育を受けられる社会を作る為に貢献する事です。生まれた国や貧富の差で夢をあきらめる社会であってははいけません。ステラには叶えたい夢がたくさんありました。彼女の人生がこのまま悲劇であり続けるべきではないのです。